

Features 特集

琵琶湖疏水と京都市動物園

～疏水がはぐくむ動物たち～

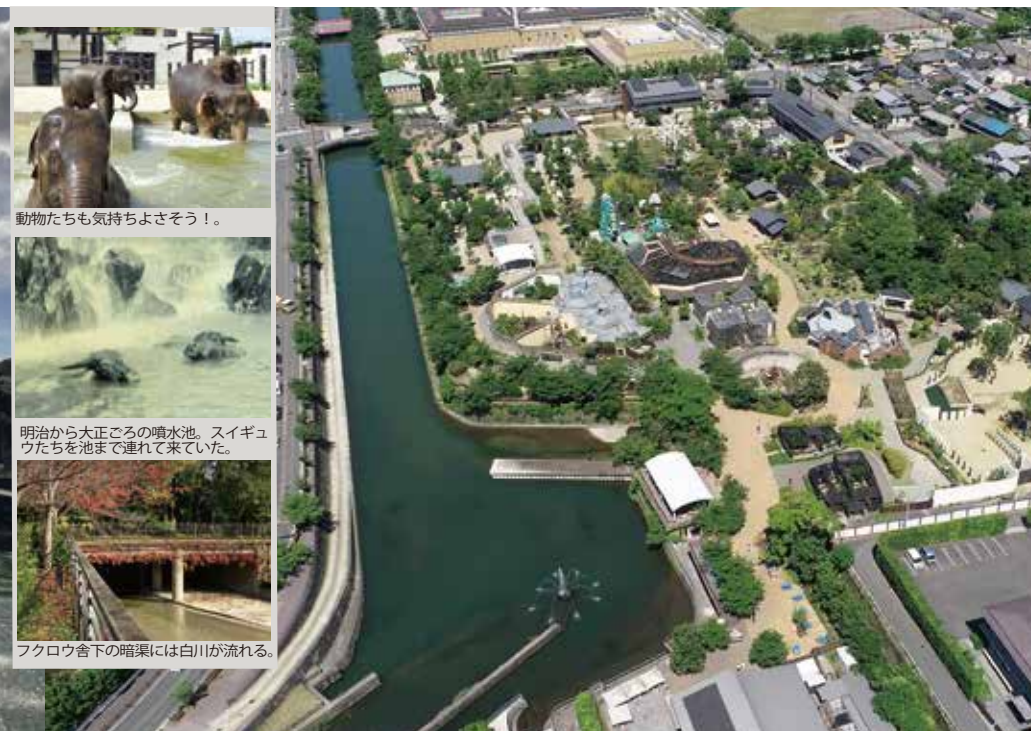
明治の初め、実質上の東京遷都に伴う京都の人々の動揺や、地域の衰退に歯止めをかけるため、琵琶湖から京都へ水を引くという大がかりな琵琶湖疏水建設が急速に現実化しました。明治23年に第一疏水が開通し、明治24年に蹴上インクラインの運用が始まったことで、動物園を含む岡崎地域は水力発電、生業関連事業などで大きく発展することとなります。岡崎中心部の土地で、明治28年に平安遷都千百年記念祭と第4回内国動物博覧会が同時

開催され、それを期に創建された平安神宮には疏水から引水した神苑が築かれ、主要パビリオンとして美術館や工業館とともに動物園にとりて、琵琶湖疏水はなくてはならないものです。岡崎地域の近代庭園の水源はおもに琵琶湖疏水で、園池を巡った水は二次・三次利用を経て元の疏水へ、あるいは琵琶湖疏水開通とともに合流することとなった白川へ戻ります。同じように、動物園内を潤した水は隣接する施設へと流れこみ、岡崎の自然河川と疏水が織りなす複雑な水系の一翼を担っています。

動物たちの飲水やプール以外にも、動物舎の清掃などにたくさんの水が必要な動物園にとりて、琵琶湖疏水はなくてはならないものです。岡崎地域の近代庭園の水源はおもに琵琶湖疏水で、園池を巡った水は二次・三次利用を経て元の疏水へ、あるいは琵琶湖疏水開通とともに合流することとなった白川へ戻ります。同じように、動物園内を潤した水は隣接する施設へと流れこみ、岡崎の自然河川と疏水が織りなす複雑な水系の一翼を担っています。



インクラインを正面から一望できる。



動物園と、その南を流れる琵琶湖疏水。疏水の水のおかげで園内は緑豊かになり、動物も人もほっと和むことができます。



動物たちも気持ちよさそう！

明治から大正ごろの噴水池。スイギュウたちを池まで連れて来ていた。

フクロウ舎下の暗渠には白川が流れる。

琵琶湖・淀川水系

淀川水系は、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良の2府4県にまたがる流域面積8,240平方キロメートル、幹線流路延長75.1キロメートルに及び日本を代表する水系。その上流域は、日本最大の湖である琵琶湖を水源にもつ宇治川、三重、奈良などに水源をもつ木津川、京都など西に流域をもつ桂川に大別される。近年は、琵琶湖・淀川流域として表現されることが多くなっている。



イチモンジタナゴはどこにいる？

～琵琶湖疏水でつながる命～

琵琶湖疏水の水は岡崎地域の多くの庭園の池に利用されており、その中でも平安神宮神苑の池では、現在の琵琶湖ではほとんど見られなくなったイチモンジタナゴが唯一生息しています。イチモンジタナゴが琵琶湖で数を減らしている理由の一つにブルーギルやオオクチバスなどの外来魚による捕食があります。平安神宮では疏水の導水路に砂ろ過装置を設置したため、昭和56年以降は琵琶湖から魚が流入することなく、それ以前に流入し、定着していたイチモンジタナゴが命をつなぐことができたのです。

疏水の水を利用して動物たち

琵琶湖疏水とともにその歴史を刻んできた当園の動物たちにとって、疏水の水は切っても切り離せないものです。園内を巡りながら、疏水の水がどこで、どの動物に使用されているか探してみるのも楽しいですよ！意外と様々な場所で、豊富に水が使われていることに気づくはずですよ。



5 ヤブイヌ
指の間に水かきがあり、泳ぐのが得意なヤブイヌにとって、プールがあるのはとてもうれしいこと。夏場以外にも泳いだり、もぐったり。



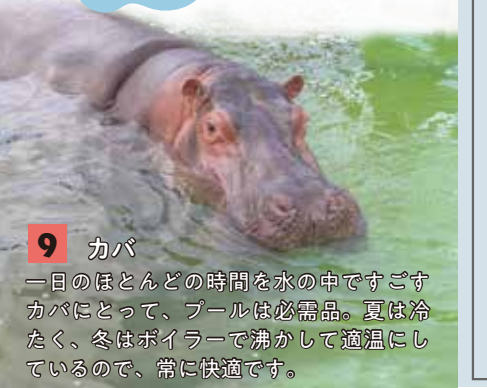
6 ファンボルトペンギン
本来は海鳥のペンギンも当園では疏水の水で暮らしています。真水では補えないミネラル分は、エサの魚に塩を混ぜることで与えています。



7 カメ
おとぎの国のカメ池にはクサガメとインガメがくらしています。水温の安定した疏水の水の中で冬眠もしています。



8 フラミンゴ
フラミンゴは水に浮かぶエサを、くちばしにあるくし状の部分で漉しとって食べます。独特のくちばしは、水辺の生活ならではのものです。



9 カバ
一日のほとんどの時間を水の中で過ごすカバにとって、プールは必需品。夏は冷たく、冬はボイラーで沸かして適温にしているので、常に快適です。



1 水禽舎の鳥たち
京都の森の水禽舎には、常に疏水の水がかけ流しで流れています。時には疏水から貝やカニが流れ込んでくることも。



2 京都の森
ムササビ舎前の池から湧き出した疏水の水は、京都の森の小川と田んぼを潤しながら、最後は噴水池に流れ込みます。小川では、夏はホタルも見ることができます。



3 バク
バクは水の中でうんちするため、バク舎には比較的大きなプールがあります。もちろん水は毎日交換します。



4 アジアゾウ
ゾウの森のプールは容積78立方メートル！5頭のゾウたちのために水がたっぷり使われるのも疏水の水があるおかげ。

エコ！噴水池の噴水

動物園で120年間変わらぬ姿を留める噴水池の水は、どのように噴き出しているのでしょうか。実は、電力は一切使っていないでもエコな噴水なのです。その仕組みは「高低差」。琵琶湖と動物園の標高の違いを利用して、流れ込む水の水压で噴き出しています。時には噴水の出が悪くなり、噴出口を見るとたくさんの小さなシジミが詰まっていたことも…。疏水の水がそのまま流れ込む噴水ならではのできごとです。これからも皆様に親しまれるよう大切に維持管理していきます。



動物園開園当初からほとんど変わらない姿を留める噴水池。現在より水に勢いがありますね。

琵琶湖水面との高低差が生む水圧だけで吹き上がる天然噴水。動物園から見える南禅寺船溜や東本願寺御影堂門前の噴水も同じ仕組みです。

噴水池に集まる生き物たち

春先からウシガエルのオタマジャクシやアメリカザリガニの姿が目立つ噴水池ですが、過去の池干しでは、ヤリタナゴ、オイカワ、ヨシノボリなどの在来種も確認されました。それらの生き物を求めて、アオサギやカワセミ、時にはヘビもやってきます。池の周りの花には、昆虫も集まります。水のある場所は、さまざまな生き物の生活の場となっています。



スッポン カワセミ オイカワ
ハグロトンボ ウシガエル アオサギ